震災犠牲者の冥福祈り

南三陸町 ミャンマーから大仏

南三陸町志津川黒崎地内の高台に、ミャンマーから贈られた大仏一体が建立された。25日にミャンマーの僧侶が訪れ開眼法要が行われ、志津川湾を望む高台で、東日本大震災で犠牲になった人々の冥福を祈った。

同国僧侶が開眼法要

仏像は台座を含め高さ5㍍あり、ミャンマーの大理石製。建立場所の「海の見える命の森」を所有する阿部長商店に、同国の総合商社「TOMOSADA」から贈られた。

阿部長商店の阿部泰浩社長（56）の友人を介し、TOMOSADAの関係者が5年前に気仙沼市や南三陸町を訪問。多くの人が犠牲となった被災地の様子を目にし、「亡くなった人を慰霊する場ができないか」と、大仏の寄贈を検討してきた。

大仏はミャンマーから船で仙台港に送られた後、南三陸まで陸送。震災後、鎮魂や防災を目的に、ボランティアらの手で整備された「海の見える命の森」の一角に運ばれ、10月下旬に設置された。

開眼法要にはミャンマーの僧侶8人をはじめ、阿部長商店、TOMOSADAの関係者ら約80人が参列。魂が吹き込まれた大仏を前に、震災犠牲者のみ霊を慰めるとともに、町の復興を願った。

ミャンマーは2004年のスマトラ島沖地震による津波で被害を受け、犠牲者も出ている。TOMOSADA共同代表のマウン・テッ・ミャ・ウーさん（52）は「同じ人間として突然命を奪われることを思うと、涙が流れた。この場所がミャンマーをはじめ、仏教の国々の人が多く訪れる場所になってほしい」、阿部社長は「志津川湾を一望でき、この地の人たちを見守る場所に多くの協力で建立でき、感無量。しっかり管理し、地域の名所となるよう発信していきたい」と話した。

大仏を前に行われた開眼法要

2019/11/27 【三陸新報】